

筑波大学  
生命環境科学研究科  
国際連携持続環境科学専攻  
マレーシア工科大学  
マレーシア日本国際工科院

# 外部評価シート (抜粋・日本語版)

対象期間

2017年9月 - 2021年3月

外部評価委員

寶馨 教授 (委員長) 京都大学 (大学院総合生存学館 (思修館))  
Luqman Chuah bin Abdullah 教授 プトラマレーシア大学 (化学、環境工学、工学科)  
梅宮 直樹 博士 国際協力機構 (JICA)  
川廷 昌弘 様 株式会社博報堂

## 外部評価の方法

4名の外部評価委員会の方々に、8つの評価項目について、設置・成果の状況を評価して頂き、コメントを頂きます。

評価基準は自己評価の基準と同様で、下記の4段階の評価をお願いいたします。

IV	当初の見込みよりも達成できている
III	当初の見込み通り達成できている
II	十分に達成できていない
I	達成できていない

## 1. 共同学位プログラム設立の構造

### 1-1. 共同設立の構造

判断基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>本プログラムは、社会から求められていることに十分応えられているか</li> <li>本プログラムは、教育上の必要性に十分応えられているか</li> </ul>	
自己評価	評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>両大学との共同連携により、社会的教育的要求に応える</li> <li>両大学は異なる特徴を持っており、共同して学位プログラムを運営することは環境科学における新しいフィールドの開拓に貢献</li> </ul>
	III	
外部評価委員の評価及びコメント	評価	IV ・ <b>III</b> ・ II ・ I
	コメント	<ul style="list-style-type: none"> <li>理学系(筑波大)と工学系(UTM-MJIIT)は、良い組み合わせである</li> <li>日馬両国の異なる環境問題を広い視野で共有できる良い組み合わせである</li> <li>JDプログラムは持続可能性、環境問題の解決に資する人材養成を目指す社会的要請にも合致したものである。</li> <li>SDGsの実務家を養成するプログラムとして機能する様構築されている</li> </ul>

1-2. 方針

判断基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>入試合格基準が定められ公開されているか。</li> <li>教育上の目的に基づきカリキュラムポリシーが明確に定められ公開されているか。</li> <li>学位授与方針は、社会的及び教育上の目的に基づいて規定され公開されているか</li> <li>修了認定については、公平かつ厳格に行われているか。</li> </ul>	
自己評価	<p>評価</p> <p>III</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位授与方針、カリキュラム方針、入試方針は適切かつ厳格に定められ、明記されたものがウェブサイトなどで公開されている。</li> <li>すべてのコースは、カリキュラムポリシーに基き大学課程に従って提供されている。</li> <li>入試は入試方針に基づき、両大学が共同で行っている。</li> </ul>
外部評価委員の評価及びコメント	<p>評価</p> <p>コメント</p>	<p>IV ・ ㊦ ・ II ・ I</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日馬の入学時期が半年ずれているが、よく運営されている</li> <li>3つのポリシーが適切に定められ、Web上で公開されている。</li> <li>3つのポリシーを明確にし公開することで、高い理想を持つ学生の注目を集め、モチベーションを高めることができている。</li> </ul>

1-3. 品質保証システム

判断基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>共同で自己評価を行い、その結果は公開され、教育活動の向上に使われているか。</li> <li>共同で外部評価を行い、その結果は公開され、教育活動の向上に使われているか。</li> </ul>	
自己評価	<p>評価</p> <p>III</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己評価は両大学共同で行われ、結果は公開されており、それは教育活動の向上に役立っている。</li> <li>外部評価の結果は公開され(予定)、また教員会議においても教員間で共有する。</li> <li>本プログラムの情報は本プログラム及び大学のウェブサイトで公開されている。</li> </ul>
外部評価委員の評価及びコメント	<p>評価</p> <p>コメント</p>	<p>IV ・ ㊦ ・ II ・ I</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>まだ3年を経た段階で評価は困難。毎年の自己評価は有用かつ重要である。</li> <li>自己評価、外部評価は将来の改善のため適切に実施されている。</li> <li>共同で自己評価が行われ、教育活動に生かされている。外部評価は今回共同で実施され、JDPの改善に活用される。</li> <li>JDPを運営する教員はプログラムの質向上に努めている。</li> </ul>

## 2. プログラムの運営

### 2-1. プログラム運営の進捗状況

判断基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>共同プログラムは当初の計画通り適切に運営されているか。</li> </ul>	
自己評価	評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>共同プログラムは今日まで適切に構築されてきた。</li> <li>両大学は定期的な対面会議、ウェブ会議、メールでのやり取りなどにより活発にコミュニケーションを取っている。</li> </ul>
	III	
外部評価委員の評価及びコメント	評価	<p style="text-align: center;">④ ・ III ・ II ・ I</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>両大学は良く協調している。COVID-19 のため日馬の学生移動は特に困難であったと思われる。オンライン授業は双方に有益であった。</li> <li>共同実施システムはよく構築されている。ジョイントディグリーを検討する他大学の他のプログラムのロールモデルとなり得る。</li> <li>異なる学年暦を持つ大学間の JDP の実施は困難であるが、当 JDP は適切に策定され、注意深く考えられている。両大学間の緊密な連携によりよく運営されている。</li> <li>コロナ禍の中でウェブ会議などが常態化することで、こういった海外連携がスムーズな環境や意識が整備されていることも追い風になっているように感じる。</li> </ul>
	コメント	

### 2-2. 学生定員の充足状況

判断基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>入試は、入試方針に従い行われているか。</li> <li>学生の数は、定員数を満たしているか。</li> </ul>	
自己評価	評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>入試は、入試方針に従い、学術上の知識、研究計画、英語能力を証明する出願書類並びに、出願動機、研究のために必要な知識の有無及び英語力をテストするための面接によって行われている。</li> <li>学生の数は定員の上限を満たしてはいないが、毎年両大学は入学者を獲得している。</li> </ul>
	II	
外部評価委員の評価及びコメント	評価	<p style="text-align: center;">IV ・ III ・ ② ・ I</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>合同の入試実施委員会は適切に運営されている。入学者数は問題がある。学生の加入が必要である。他大学においても英語スコアの提出が障害となっており、口頭試問で英語力を評価するのは理解できる。</li> <li>入試は適切に実施されている。入学者数は増加傾向である。勧誘活動が重要であり、卒業生の活動報告、コース紹介は有効である。</li> <li>入試はアドミッションポリシーに従って適正に実施されている。入学者は定員に達していないが、毎年両大学で1名は入学している。</li> </ul>
	コメント	

- 学生への SDGs の認知向上に伴いその達成に貢献できる研究やプログラムへの期待は年々高まっているので、このプログラムの価値を高め多様な学生にアピールする広報のあり方など見直すことで、潜在的なポテンシャルをまだまだ掘り起こせると思う。

## 2-3. シラバス

判断基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育課程はカリキュラムポリシーに則って規定され施行されているか。</li> </ul>	
自己評価	評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>本プログラムのカリキュラムは筑波大学のカリキュラム管理システム(KdB)から公開されている。</li> </ul>
	Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラムの内容は、カリキュラムポリシーの遵守のため、専門かつ担当のアカデミックスタッフによってチェックされている。</li> </ul>
外部評価委員の評価及びコメント	評価	<p style="text-align: center;">IV ・ Ⅲ ・ II ・ I</p>
	コメント	<ul style="list-style-type: none"> <li>両大学の学習プロセスを統合した「フィールドに根ざした環境工学」のカリキュラム方針は素晴らしい。</li> <li>シラバスは持続環境科学の分野を包含している。しかし柔軟なカリキュラム改変をできるようにするべきである。持続性は動的な問題であり、シラバスも絶えず評価して状況に対応すべき。</li> <li>当プログラムは多様な研究者で構成され、SDGs の実行状況に合わせて改善する余地はある。</li> </ul>

## 2-4. 学績評価方法と判断基準

判断基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>学績評価方法と判断基準（成績及び修了）が各コースごとに定められているか。また、それは公平に行われており、かつ学生に周知されているか。</li> <li>学位論文の審査基準は公開されているか。</li> <li>学術論文審査は両大学の審査委員会により、共同で行われているか。</li> </ul>	
自己評価	評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>両大学間において、慎重な議論を重ねることで成績の換算方法につき合意に至った。</li> </ul>
	Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> <li>学術論文審査の方法については公開され、かつ両大学の審査委員会により合同で行われている。</li> </ul>
外部評価委員の評価及びコメント	評価	<p style="text-align: center;">IV ・ Ⅲ ・ II ・ I</p>
	コメント	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価方法は適切である。筑波は A+, A, B, C, and D で 0-100 でないのか。一筑波大学では評価のみ公表している。</li> <li>評点の変換に困難はないか。一筑波大学も 0-100 の評価を UTM に提供している。</li> <li>評価は適切に行われている。ルーブリック式の評価方法の導入が提案できる。</li> <li>教員は学生との毎日の交流の中で信頼関係を構築しており、評価は厳密に且つ熱心に行われている。</li> </ul>

### 3. 学生のサポート体制

#### 3-1. 学生のサポート体制

判断基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生の宿泊施設におけるサポートはされているか。</li> <li>学生への金銭的サポートは考慮されているか。</li> <li>教育環境は適切に整っているか</li> <li>緊急時の体制は整っているか。</li> </ul>	
自己評価	評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生は、大学キャンパス内の宿舎を利用できる。</li> <li>学生は奨学金により金銭的サポートを受けることができる。</li> </ul>
	Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生は教員及び事務職員からサポートを受けることができる。</li> <li>緊急時の体制は整備されている。</li> </ul>
外部評価委員の評価及びコメント	評価          コメント	IV ・ Ⅲ ・ II ・ I  <ul style="list-style-type: none"> <li>宿舎の提供、相手大学で授業料不徴収は適切な学生支援である。学習環境は良く準備されている。</li> <li>学生支援の方法は両大学により適切に実行されている。</li> <li>宿舎が提供され、学生は両大学の宿舎を利用できる。奨学金として金銭的サポートも検討され、緊急所の対応も整備されている。</li> <li>学生の支援体制が備わっている。COVID-19により状況が変化しているので、学生支援体制も柔軟に対応できる様にすべき。</li> </ul>

#### 総合評価(委員長)

結論	評価          コメント  (日本語コメント) このジョイントディグリープログラムは、さまざまな観点からよく計画され運営されています。筑波大学とマレーシア工科大学(MJIT)の教授陣及び事務担当者の皆様のご尽力に敬意を表します。 望むらくは、履修学生数が定員を満たすことですが、両大学において学生の参加をさらに促していただければと存じます。オンライン授業が当たり前になってきたので、経費と時間を節約する形でより多くの学生を受け入れることができるかもしれませんね。定員の三人に限らずに増やすことも可能となることでしょう。 修了生の進路については、まだ社会に出た人の数が少ない状況です。このプログラムの成否は修了生のキャリアパスと業績によって評価されることとなりますが、それにはまだ何年か時間がかかります。 中間評価としては、極めて妥当な成果を上げており、将来の成功が期待できるものと言えます。 この意欲的で興味深い試みが順調に進めていかれますことを楽しみにしております。
----	---

